
金の星座 銀の星

月野安積

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の星座 銀の星

【Nコード】

N2741BA

【作者名】

月野安積

【あらすじ】

御前試合の為に王都に出てきた青年は、怪しい不思議な赤い髪の男と出会う、知らぬ間に大きな力に飲み込まれて行く主人公と、全てが揃ってしまうと厄災が訪れるという5つの聖剣の物語

第一章 第一話 (前書き)

以前、同人誌で発表したもので
一章は完結しております。

第一章 第一話

天羽境、天羽ノ宮、昔そう呼ばれていた所は、今ではすっかり焼け野原になり草木の生えぬ土地となった。

何者もそこには住めぬ代わりに、新天羽ノ宮ができた、二度に渡る内戦の為、人が住めなくなった事と、現在の球帝の后妃の死により都を移し変えたのだった。

球帝の住む新しい宮殿の周りには、華やかな町ができ、そして戦いの痛手が癒えた頃、既に五十年が経っていた……。

「へーっ、でっけー墓だぜ」

青い髪を無造作に束ね、青くも見えるその黒い瞳をその建物に向け、青年、いやまだ少年とも言える体躯の持ち主を呟いた。

青年が見つめていた建築物は、今の球帝の後の墓である。それは新天羽境の町が見渡せる小高い丘の上に建っている。そこにどっかりと腰を掛け、青年は水を飲んでいた。

(都まで、もう少しだ……)

不意に遠くから馬の足音が聞こえたと思うと、いきなり小刀が風を切り青年の頬を掠めた。

「うおっ!!」

飲んでいた水の入った筒を投げ出し、あわてて逃げる。

「何をするっ」

馬を横付けにして、それは言った。

「その建物は、現球帝の後の墓と知って座っていたのか？」

夕日の様な赤い髪、額に布を巻きつけ、髪と同じ瞳を持つ男が言った。

「ごめん、人が来るとは思っていなかったから、少し休ませて貰っていたんだ」

「まあいい、お前、名前は何と言う。何故天羽ノ都まで来た？」

「俺の名はシャハード、風の峡谷から来た。一週間後の現炎皇球帝の宮殿で行われる御前試合に参加する為に来たんだ」

相手は尋ねておいたくせに、聞いているのかいないのか、馬から降り、馬の横に括りつけてあった袋の中から果物を取り出し、墓の前に供えた。

シャハードは続けて言った。

「勝ち残ったら球帝と一戦交えて貰えるばかりか、親衛隊に入隊できるからな、そうしたら、お袋と妹を都に呼んで町で生活が出来る」

「なかなか難しいぞ、試合に勝ち残るのはな。それに、球帝は変わり者だ、勝ち残った者がどれほど強かろうと、気に入らなければ傍に置かないと思うが」

「ちえっ、あんた腹が立つなあ、そんなの行ってみなけりや分からないじゃないか」

シャハードは腕を組んで赤毛の青年を睨んだ。

「名前は何と言ったかな、」

「シャハードだっ！、あんたは？」

「ナシユムーナ、ナシユーと呼ばれている・・・」

「ナシユー」

ナシユーは少し大きめの目を吊り上げたシャハードを見ながら鼻で笑って馬に乗った。

「それでは、またどこかで！、シャハード、二度と墓石に座るんじやないぞ」

第一章 第一話 (後書き)

出来れば一ヶ月以内に一章を終わらせたいかと・・・
ガンバリマス(´・`・´)

第二話

「遅い、」

天羽境天羽ノ宮、炎皇殿と呼ばれる建物は球帝のプライベートな住居スペースである。

その中でも一番高いその塔は、天羽ノ都が一望でき、遠くの山間に昔の都の跡が見えた……。

「誰か、誰かおらぬか！」

「アジユがここにおります……、カジヤ殿、親衛隊長ともあめうお人が、その様な大声を出されておりますと、みな何事かと思いません」

「ああ、すまぬ。しかし、あの様に真実の鐘が鳴っていると言うのにあの方はまだ戻られぬ」

カジヤと呼ばれた黒髪青年は、手に握りこぶしを作ってバルコニーから外を睨み、鐘の音を聞いていた。

「今まで約束を破られた事が無いと言うのに、今日はどうした事だ」

「まあ、そう焦らずに、もう半刻したら城を出て探しに参りましょう。……ああ、でもその心配はいらなくなりましたわ」

「？」

アジユラは真下を指差した、そこには、無造作に長い赤毛を三つ編みにした男が見える。

「あーあ、またあの様に砂だらけになって、・・・あの髪も纏れまくっているではないか、女官達の嘆きがここまで聞こえてきそうだ」
あわただしく、小間使いの従者が部屋に入ってきた。

「カジャ殿、アジュ殿、球帝がお呼びでございます」

「今日、遅かった理由でも聞かせて頂けるのであろうか・・・」

カジャは怪訝そうに呟いた、それをカジャは苦笑で返した。

そこは女人の渦であった。

カジャは銀の洗面器に湯を入れた侍女とぶつかりそうになり、慌てて避けた。

アジュはその後ろに続いていた白い布を持った女官のモロにぶつかった。

その奥から球帝の聞きなれた声が聞こえた。

「もう・・・、よいと言っている・・・」

「なりませぬ！、この後、街と村より賢者の集まりが宮殿でありますゆえ、たとえ御簾越しであろうとも、この様なお姿では、このセラーシャ、サリユー様に合わせる顔がございません！」

「・・・どうしてここで、サリユーが出てくるのだ？」

「ああ、美しいサリユー姫様・・・、別世界にてさぞかし苦労されておる事でしょう・・・。このセラーシャ、姫様より、よくよく父上を宜しくと仰せつかっておりますゆえ、ここで引く訳には参りませぬ！..」

球帝の服を、何とかひっぺがそうとしているふくよかな女性は、彼を捲くし立て、逃げ腰になっている彼の髪を見て別の女官に解くように言った。

最初は少なからず抵抗していた球帝だったが、絶句して言いなりになっていた。

その様子を高みの見物をしていたカジャが呟いた。

「俺はな、始めてここにお仕えした時、この騒ぎを見てそりゃーびつくりしたもんだ。・・・今はもうそんな事は無いけどな」

「何をそこで、ボーっと立っておるのだ・・・助けようかなとかは思わんのか」

その言葉を聞いてカジャは一礼した、続けてアジュラも礼をする。

「お呼びと聞きましたが、我ら二人に何か？」

「ちょ・・・一寸待ってくれ」

カジャに聞くのを待てと言いたかったのか、女官に髪を解くのを待てと言いたかったのか、周りの動きがピタリと止まった。

「今年もやるのだろうか？ほら・・・」

「御前試合でございませうか」

カジャの後ろに控えていたアジュラがぼそりと言った。

「それが、どうか？」

「私もそれに参加しようと思うのだが、この頃体が鈍ってな、三日に一度の遠乗りではストレスが貯まるのだ」

「誰ぞ！、湯浴みの用意を！」

「風呂に入るのか！！ちよつと待たんか！！！」

「この砂埃は着替えただけでは取れませぬ、髪も梳いただけではどうにもこうにも・・・、カジヤ、球帝をお連れしなさい」

「しかし・・・」

「今はいい、一寸待て！」

球帝が踵を返し、どこかに行こうとするのを、腕の強い女官が二人左右から押さえ込み、動けないように拘束した。

「カジヤ、速く湯殿までお連れください」

球帝より背が高いのはこの宮殿で彼しかいないのだ。

「諦めなさいませ・・・」

アジュがそつと耳もとで囁いた。

「なにっ」

カジヤがセラーシヤの言葉に急かされるように、球帝の傍に行き、女性を抱くように掲げ上げた。

「降ろせ、よい、自分で行ける」

「いえ、このまま参りましょう、私はセラーシヤ殿と目を合わせるのが恐ろしい・・・」

「・・・この界で一番の高位に就くのは誰か？」

球帝は怒っている様だったが、暴れはしなかった。

「はっ、天羽境では炎皇球帝つまり貴方、しかしながら、この宮殿を取り仕切っているのはあのセラージャ様です！」

「よく分かっているじゃないか……」

その後、球帝は湯煙の中に消えて行き、髪にしっかりと水分を含ませ、白い湯上りの布を身に纏い出てきた。

すっかり疲れきった様子で、籐で出来た長いすに横たわり、水をしっかりと含んだ髪を重そうに掻き揚げた。

「平和な事だ……」

「は？……」

突然の球帝の言葉に、カジヤは驚いた。濡れた髪を指で弾き、彼はカジヤを見つめる。

「しかし自然王の血を継ぐものが、私と娘そしてナゼールの5歳児だけになってしまった、風王の座は娘が継いだから良いとして、地王、水王の座は空席か……。どうだ、カジヤ、どちらか継いでみようとは思わんか？精霊の力が強まると、この世は少し安定するのだ」

「私には荷が重い様に感じられます……」

分かっている、と言うように球帝は頷き微笑みながら起き上がった。

「そう言えば、居間で何か言い掛けていらっしやいましたが？」

「おお、そうだ」

球帝は辺りを見回し、彼とカジヤしか居ないのを確認すると、手招きで呼んだ。

「今年の試合、秘密で私も混ぜて欲しいのだが・・・」

「それは・・・なりません」

普通止めるだろう、当たり前だ。

カジヤは大きく目を見開いて反対した。

「力が違いすぎるのではありませんか、殿が勝ち進んで行ってどうするのです？これは遊びではなく、親衛隊員を選抜する大切な行事であり試験も兼ねているのです」

「分かっている、ちょっとな、面白いのを見つけたのだ、試してみたいのだ・・・どこまでやれるのかをな・・・」

きつと言い出したら、いくら止めても聞いてくれはしない。

球帝は立ち上がり、寝室へ向かって歩き出した。

「他言無用ぞ、分かっていると思うがな」

残されたカジヤは無言で見送った。

「さて、準備をせねばなるまい、まったく一度言い出したら何も聞いて下さらないのだから・・・」

主の姿が完全に見えなくなってから、カジヤは呟いた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2741ba/>

金の星座 銀の星

2012年1月9日01時46分発行